
無秩序な世界の一人の代理人

戒人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無秩序な世界の一人の代理人

【Nコード】

N3748Q

【作者名】

戒人

【あらすじ】

遠い未来、世界は異世界と融合し交流をもつ

ある特異な力をもった少年がいた

その少年の名は“月代戒人【つきしろかいと】”両親を早くに亡くし、姉二人、妹一人の家族と仲睦まじく暮らしていた彼の人生は……変わったり、あまり変わらなかったり

プロローグ（前書き）

二個目の小説なのですが最初の小説はまだ書き終わってません（笑）
なのでアイデアを閃いた時にしか書かない小説なので更新は不定期です

あと主人公の名前が私のユーザーネームなのは前々からオリジナルを書いた時の主人公の名前にに使用おうと思っていたからですので自分を当てはめている訳ではないのであしからず

プロローグ

「君、少し尋ねたい事があるのだが」

「えっ？ 俺ですか？」

高校の始業式を終え、学校からの帰り道、姉さん達が家庭を養うために働いて疲れて帰って来るだろうと思い、家事の一切を引き受けている俺は妹を置いて先に帰路についていたのだが、後ろから男性の声を聞き振り向く

その先には白のシャツに黒のコートとズボンというサラリーマン風な男性が鋭い目でこちらを見ている

少し後退りしそうになったけど失礼と思い踏み止まる

男性は口の端を引き上げ、笑うと言うよりニヤケると言った方が妥当な笑みを見せる

「そう君だ。君は今の世界をどう思う……………？」

アンケートか何かか？ と疑ったがアンケートなら疑うことも無いだろうと解釈し、正直に答える

「今の世界ですか……………正直、昔の世界……………世界統合が始まる前の世界の方が良かったですね」

「何故そう思う？」

「世界統合が完全に終わった時に俺の両親は死にました。原因は異世界の細菌による病で、まだ小学生六年生だった俺は、高校生だった姉一人と、中学生だった姉一人と、まだ小学生五年生だった妹と一緒に祖父母の家に引き取られて育ちました。俺達は異世界を憎みました。しかし彼らも同じく、こちらの病で苦しんでいました。お互いが望まなかった現象に絶望するだけじゃ駄目だった。今の世界はよい関係を築いています。でもやはり……異世界を憎まずにはいられなかった」

「ふむ……」

長い昔話をしている俺に彼は相づちを打ってくれていた

「そして、昔の世界が良かったと思う一番の理由は、犯罪の増加と魔法です」

「犯罪と魔法……？」

「はい。魔法は異世界の物でしたけど、お互いの文化交流の果て人間にも魔法を、亜人にも科学が復興しました。しかし力を持った者とは使わずにはいられないもの。中には力を制御できず、重犯罪者になる人間も増えました。科学を持った亜人も然りです」

戦争は無い

でも魔法を使った犯罪が追加されたせいで周りへの被害が甚大な事故や事件が多々あった

俺の周りにも亜人の友人もいれば人間の友人もいる

その両方の話を聞くと大概がお互いの文化に対する愚痴だったり、利点だったり

「俺も魔法は使えます。でも、戦う力を望んでいなかった俺には護身止まりです。だから、俺は昔の世界の方が良かった。今の世界は……正直気が休まりません」

魔法は種類別に分けられる

火・水・風・土・雷・氷・闇・光が主だけど、中にはオリジナルの魔法を創ったりする者もいる

そして下級、中級、上級、最上級、に魔法は分けられる

一つを極める者もいれば広く浅く学ぶ者もいる

俺は火・雷を使える

鍛えれば他の系統を使う事が可能になるが、そんな暇はないのでやっていない

できれば水が欲しかった

水は守りや治癒が主体の魔法で戦いを望まない者が良く使う魔法

でも何故か俺には好戦的な者が使う火と雷が使える

使うことなんであまり無いけど、火は家事に役立つし、雷は極力弱めたらマッサージに使えるので姉さん達によくしてあげている

結局、魔法は使う者によって道を変える物だ

俺は絶対に……魔法を人を傷付けるためには使わない、まあ防衛なら仕方ないがね

「……………気に入った」

「えっ……………？」

男性が小さく呟く

下に向けていた顔を上に向けた途端に彼の指先が俺の額に当てられる

《グラァッ……………！》

「なっ……………？」

視界が歪む

風景が歪み、色も変わる

男性も歪み、色も変わり、遂には形さえも変わる

「貴方に、神の代理を頼みます。私一人では見えない所をどうか、よろしくお願いいたします」

意識が飛ぶ

その刹那に見えた

俺の眉間に細い指を置き、優しく微笑む女性が

俺は理解した。そして一言を残して意識が深淵に沈んだ

「女神様……」

第一話 最愛の家族（前書き）

投稿遅くね？ 恋姫の小説と同じ長さだから仕方ない

第一話 最愛の家族

か——と か——ん かい——に——

「？」

誰だ？ 何を言ってるんだ？ 今、俺どうなってるんだ？

真っ暗。俺の視界は黒という色しか無い。でも………なんだろう、体が軽い。なのに起き上がれない。というよりは、体があるという感覚が無い。目を閉じてるのかもわからない

えーと、確か知らない男に話しかけられて、答え終わったらいきなり視界が歪んで、一瞬だけ女性の顔が見えたような———そうだ！男性が女性に変わって、それは女神様だったんだ！

そうかそうか。俺女神様に………何されたんだろ？

それにしても………綺麗だったなあ………。ん？ 何だか上から光がさして………あの、何でしょう？ あのフランダ―の犬の泣ける最終話に出てきたような衣を纏った幼児達は………？

視界が黒ではなく白に変わり、上には青天が現れて、視界が白になったおかげで見えるようになった俺の体を幼児達は軽々と持ち上げて、背中の翼を羽ばたかせ天に誘わんと———待てえー！ まだ俺は死ねないんだ！ 姉さん達と妹の花嫁姿を見る前に死ぬわけに

はいかないんだぁーっ！

お願い天使様女神様仏様！！ 最低でもやらないといけない家事のメニューを書き置きで遺させてください！！ だってあの姉妹、家事の免疫が無くて満足にこなせないんです！ 後生です！ まだ死なせないでください――

《パツ》

願いが通じたのか天使様達が俺の体を離した

……………空中で

「うわぁぁぁぁー！！！！！」

頭からの落下

青い空を見ながら落下する俺は目を閉じる

すると顔に冷たい何かが落ちてきて目を開く

青天は曇天に変わって雨が降る

そんな中でも俺の落下は終わらない

天国を拒んだから、地獄に落とされたのだろうか……………？

ふざけるな。 まだ……………俺は死ねないんだよっ！！

『戒人！！』

耳に届いた俺の名を呼ぶ声。聞き覚えのある三つの声に後押しされて、俺は閉じていた目を見開き、俺にできる精一杯をする

「我が命の灯火よ！ 我が背に出で来て翼となりて、我を天へと舞い上げよ！！」

『フレイムウイング！』

背中に朱色の魔方阵が展開し、紅蓮の炎が噴き出し翼に変わる

上級魔法、俺の魔力を全て使わなければ使えない魔法だが、何故か魔力がほぼ残っている

雨が翼に当たるが消えるわけはなく、蒸発させていく

曇天を見据え、高速で上昇する

曇天の向こうから聞き覚えのある三つの声が聞こえる

あの雲の向こうに何かがある。そう確信した俺は上昇しながら詠唱を唱える

「来たれ雷！ 我が拳を依り代とし、破壊の眷族に恥じぬ働きを示せ！」

『トルハンマー！』

俺の拳に黄色い魔力が集まり、俺はその拳を曇天に向けた放つ

その黄色い魔力は雷になって拳の形になりながら曇天を貫いた

雷が当たった箇所の雲はとぐろを巻きながら穴を開け、俺はその穴に向かって羽ばたいた

「……………くっ！」

しかし雲は少しずつ穴を塞ぎ始める

それに焦りを感じた俺は背中の炎の翼を更に強めて羽ばたく

雨が穿つが如く降り注ぐが我慢しか出来ない

後少し……………後、少しいっ！

「とど……………っけえー！！！！」

翼を風を受け流す様な形に変え、羽ばたく

塞がる曇天と、穿つ様な形になりながら突撃する紅蓮の矢は――

「くそおっ……………！」

あと一步及ばず、遂に曇天は穴を塞いだ

しかもさっきの俺の雷を取り込んで曇天の雲は雷雲に変わった

そのうえ俺の上昇は止まることは出来ないほどに加速してしまい、
どうすることも出来ない

………一か八か、“アレ”をやってみるか

「炎よ！ 我を包み込め！ 我に降り注ぐ災厄を全て焼き尽くせ！」

『プロミネンスシエル！』

上昇する進行方向に朱の魔方陣を展開。その勢いのままそれを通
過する

炎の幕が俺を覆うが………

「くそっ、薄い！」

本で読んだだけの魔法だから使うのはこれが初めて

故に不安定で今にも消えてしまいそうだ

………そうだ！！

「ふっ………！！」

一瞬の閃き

それに賭けるしか俺には手がない

炎の翼を体を捻り右回りに一回転

それに引つ張られるかのようにプロミネンスシエルも螺旋を描き、
新たな魔法が出来た。というより加工魔法だな、こりゃ

命名するなら『スクリュードライブ』

強度が無いなら威力を上げてやればいい。貫通力と推進力を強化したこの技、スクリュードライブは見事にその二つをなした

「貫徹ええええー！！！」

ドリルの様な炎の槍になりながら雷雲に突撃し、雲中を潜る

雷鳴が耳をつんざく、炎の幕が今にも消えてしまいそうだがそこは根性、やるしかない。厚い雲の層は黒から灰色に、灰色から白に変わっていく

そして、見えた

清々しい程の青天が

「ふう……………」

翼を大きく広げ音を立てながら炎の幕を吹き飛ばす

下は先ほどの曇天が嘘の様な白い雲で埋め尽くされている

しかし俺の名を呼ぶ声の主達はどこにもいない

どこだ？

「お見事でした」

「は……………」

下からどこかで聞いた声がして、捜すためにキョロキョロと回していた視線を下に向ける

そこには真剣な目をした……………女神様が腰前あたりに手と手を組んでいた

「……………」

「降りてきても大丈夫ですよ。この雲は簡単に壊れませんから」

少しばかり警戒していたのを気付いたのかココの安全性を俺に教えてくる

俺は片足から雲に足をおろし、安全を確かめて両足を着き、翼を解除した

「……………」

「……………」

俺と女神様だけのこの空間は静寂に包まれている

「ココは、貴女が創った場所なんですか……………」

「は、はい。そうです」

先に口を開いたのは俺

それに少し詰まったかのような返事を彼女はするが、それを聞いて俺は怒りを覚えた

「あまり、良い趣味とは言えませんが……」

理由はわからないが、人に死の恐怖を味あわせるのはいただけない

「……………アレは趣味でもなければ嫌がらせでもありません。アノ行為は謂わば試験の様な物。月代戒人さん。貴方はアノ事象からいったい何を感じましたか？」

「……………」

嫌がらせならば俺の中の神様のイメージがイタズラ好きなガキンチヨまで下がるところだったが……………一番感じた事

「……………たくさんありますが、一番は家族の心配ですね。俺がここまで生きてこられたのは姉さん達と妹がいたからですし、俺自身も三人を支えることが出来ていると、自分の努力は実っていると確信しています」

おじいちゃんとおばあちゃんの家に取り取られてすぐに出来ることを探した

凜華^{りか}姉さんが高校生だったことも、長女だったこともあってバイトを始めた

統合が完了したから働き口はたくさんあって助かるって姉さんは言うってけど大概が肉体労働

女であろうとも幼かろうとも関係なく働く内容は大人が、しかも男がやるべき労働が多かった

元から芯の強い人だったから弱音は吐かず、祖父母の制止を振り払って働き続けた

それを共に見ていた穂花姉さん^{ほのか}と俺、遊菜^{ゆな}も使命感じみた感情が幼いながらも芽生え、自分の出来ることを探した

穂花姉さんは見た目からは想像出来ないほど頭が良かったから、現在飛び級して就職。しかも統合学園は人材が少なかったこともあって学園に就職

一番足りなかったのは生徒の体調を管理する保険医

言うのが遅れたが凜華姉さんも統合学園で働いている

凜華姉さんは二十三歳で高等部の教師。異例ではあるが当時の学園内ではもっとも優秀な人材であつたため引き抜かれた

穂花姉さんは凜華姉さんと一緒に卒業、この学園に保険医として就職。先ほど述べたように飛び級で凜華姉さんと一緒に時期に卒業&就職し、現在二十一歳。つまり、卒業と同時に就職したということ

凜華姉さんの使える魔法は二つ、穂花姉さんも二つ。二人共二つなのは元から使えたのがこの二つで、しかも極めている

凜華姉さんは“闇”と“氷”周りからは『冷徹な女王』と言われている。しかし俺は高らかに言いたい。俺達のために働いてくれた凜華姉さんは断じて冷徹な人間では無いと

穂花姉さんは“光”と“水”凜華姉さんと同じく二つ名があり『穏和な女王』と言われている。これは俺も同意な二つ名だ。しかし出来ればもっと教師らしくしてほしい。とくに俺の呼び方

凜華姉さんは学園では“月代”と呼び、俺は“月代先生”と呼んでいる。しかし何の因果か、姉さんは俺の担任（入学式で判明してクラスメイトから質問責めにあった）

問題は穂花姉さんだ。友人が魔法の授業で怪我したからクラスメイト数人（男子のみ）で付き添いにいった……というより穂花姉さんを見に行きたかったただだろうけど。怪我した本人はそういうのに興味がない俺を選んだのだが周りが便乗。悔しそうに歯を食い縛っていた

俺が足を怪我した友人に肩を貸しながら保健室に入り、今の現状を報告。何かを読んでいた穂花姉さんは俺と気付かずに友人を連れてくるように指示してきた

ギィッ………と回転式の椅子を回してこちらを振り向く

友人も扉の隙間から覗いていた野次馬達も穂花姉さんの顔を見て驚嘆の一息

まあ………綺麗だよな。長い黒髪に穏やかな二重の目、ほら、人ってさ、笑うと目を細めるだろ？ 穂花姉さんは常時それなんだ。

仄かに赤みを帯びた頬、雰囲気からして優しそう。『穏和な女王』
とはよく言ったものだ、ネーミングセンスに感心だな。絶対考え
た人、穂花姉さんに気があったに違いない

でもそんな穏やかな表情はなりを隠したかのように真剣な表情にか
わった

友人の足にある火傷を見つけたからだ

魔法の授業は模擬戦だったのだが友人の相手は火属性の魔法を使っ
たのだが暴走

そこに俺が割り込み、火を火で相殺した。相手より多くの魔力を
込めた下級魔法だったからこちらが勝った

そんなことを思い出しているうちに穂花姉さんの治療は一瞬で完了。

傷痕も無く、前より逆に綺麗になった肌がそこにあった

「はい終わり。　また怪我したら来てね？　すぐ治してあげるから」

と穏やかな表情に戻った穂花姉さん

はい、落ちた

友人も仄かに顔を赤らめ、野次馬達も赤らめている。　やめてくれ
そんなだらしない顔は、気持ち悪い

「付き添いの貴方もありが——」

「……………はあ」

ため息を一息。やっと気付いたよこのほんわか姉貴は

座っている友人の隣に立っていた俺を穂花姉さんは見上げたことで
やっと気付く

そして続く行動は

「戒君！！！」

「見える！」

ひらり、花卉はなびが風に煽られふわりと浮かぶかのように飛び付いてき
た穂花姉さんを避ける

「甘いわ！」

「なんだと?!」

しかし流石は血の繋がった姉である。テレパシーでも受け取ったの
か？

俺は横に体を逸らしたのだが穂花姉さんはそれに食らいつく

端から見たら何かの決闘かと間違われそうなり取り、自宅では日
常茶飯事なのだが学校でぐらい自重してくれ我が姉よ

しかし今飛び付いてきている穂花姉さんの顔はなぜもこう崩れてい
るんだろっ？ 家では嫌でも顔を会わせるのに何が嬉しいんだろ？

ガッ…………と足に何か当たる感触。振り向き見てみるとそれは保健室には絶対にあるベッド。それに足を躓かせた俺を気にすることもなく穂花姉さんは突撃

「…………あゝ、月代先生？」

「えへへえゝ、やっと戒君に会えたゝ、幸せゝ」

そう、戒君。穂花姉さんは俺を戒君と人目を気にせず言つもんだから姉さんの友達の方々からも戒君と呼ばれて恥ずかしい

友達の方々にあだ名を知られたのは姉さんが弁当を忘れたときに大
学部教室に行ったときだ、言わなくとも、わかるよな…………？

話を戻して保健室。ベッドの上で俺の胸にすりすり顔と顔を擦り付け
る穂花姉さん。その顔は見事に破顔している。家では嫌でも以

下省略

「……………」

『……………』

「うわぁ……………」

「ん？ どうしたの戒君？」

「いや…………なんでも」

おいおいおいおい、男の嫉妬はみつともないぞ皆

てかあれ魔法か？ 皆火が使えたか？ というより黒い炎なんか出せたか？

つて穂花姉さん、貴女はこの状況をわかってらっしゃいますか？
おいちよつと待て！ 顔を近づけるな！ 皆の炎がさらに黒く大きくなってるんだが！？

「……………何をしているお前ら」

「あ、リーちゃん！」

『つ、月代先生！』

「げえっ！？ 関羽！？」

ちよつとまで誰だ我が姉を三國志の勇将と言った奴は！ 完全否定できない自分が心の中にいるのが悔やましいがなんとなくわかる

ガラツと扉を開けて現れたのは凜華姉さん

家とは違い綺麗に長い後ろ髪を束ねて上向きに折り髪止めで止めたその姿はさながら女社長の様だ

前髪は端から徐々に短くなっておりおでこがよくみえる

その額には怒りマークが少なくても三つはある。 大丈夫だ凜華姉さん、そのリアクションは正しい

「生徒達の目の前だぞ。 気持ちにはわからんでもないが今は学校の

教師なのだから弁えろ」

「リーちゃんったら羨ましいんだ〜？」

「なっ……………！？ そんなことはない。 ああ、そんなことはないぞ……………」

「もう、リーちゃんは素直じゃないんだから」

穂花姉さんが凜華姉さんをからかっている間にどこぞの台所の悪魔Gもかくやという体勢で逃げ出す

乱れた体操服をただしていざ廊下へ、としたんだが裾を引っ張られる

後ろを見ると上目遣いの穂花姉さん

「がはあっ！」

「なん……………だとお……………っ！」

「はい死んだ！ 今俺死んだよ！？」

「これも……………運命か……………」

直視した俺ならともかくなんで遠目のお前らがどしゃあ……………っつと倒れるんだ？

てか姉さん？ 何で目を閉じて「ん……………」なんて……………まあわかるけど

「……………はあ」

すっ……………と穂花姉さんの頬に手を当てて固定する。動いておかしなところに当てたら嫌だしな

凜華姉さんはそれを心配そうに眺めている。大丈夫だよ、そこまで深いことはしないからさ

こら男子！ 今いいところなんだからギャーギャー騒ぐな……………つてギャラリーが増える！？

「ん……………」

「うぐっ……………」

逃げ場なし、なんて酷い。まあいいか、覚悟してかかるしかない

「……………」

「ちょ、戒君？」

チュッ……………とおでこにキスを落とす。それに少し抗議の目を向けてくるが勘弁してくれ

「姉さん？ ココ学校。あんまり無茶なこと言わないでくれ、頼むから」

ガックリと肩を落としての懇願に……………なぜかギャラリーが騒がしくなった

「ダメ。ダメよ私？ 私には年上の彼氏が……………」

「ウチの弟とどうしてここまで違うの！？ なぜウチを彼の姉に生ませてくれなかったの！？ 神様なんで！！？」

「はい死んだ！ 今私死んだわよ！？」

「これも……………運命なの…………？」

おいおいちょっとまで後半の二人。 さっきの二人の関係者だろ、ちよつと顔見せろ

「……………月代。 そろそろホームルームの時間だぞ」

「はい、わかりました。 月代先生」

シャツと背筋が伸びるほどの低い声に反応したあと出口に近づく

「戒君！！」

「な、なに穂花姉さん」

後ろからの声につい家と同じ呼び方をしてしまったが仕方ない

ニコツ笑った穂花姉さんはその口を開く

「ありがとね」

「……………」

……都合のいい。しかし甘いな俺も。つい甘やかしてしまう

「……出来るだけ顔を出すから、こんなことさせないでよ」

「へっ………？」

あゝ、恥ずかしい。多分俺の顔真っ赤だ。見ないでくれ先輩方、同級生の皆、このだらしない俺を見ないでくれ

ちなみにこんなこととはキスだからあしからず

「………いくぞ」

「はい」

廊下を凜華姉さんの背中を追いかけてながら歩く

後ろから保健室に担ぎ込まれるギャラリの方々に首を傾けながら教室へ帰った。………凜華姉さんはなぜか不機嫌だったのが気がかりだが

………

これが俺の姉さん達だ。次は妹の遊菜を紹介しよう

実は小さい時に一緒にいる時間が一番多かったのは遊菜だ。姉さん二人はバイトをしていて祖父母の家には俺と遊菜がずっといて、当然やることも同じだ

最初に言った自分のできることを探していて最初に見つけたのは料理だった。ばあちゃんに教えてもらって覚えた料理、それはハンバーグだった…………——

「さて、やるか遊菜」

「うん！ ガンバろ、戒兄！」

台所に小さな影が二つ

俺と遊菜だ

目の前には粗びき肉に玉ねぎ、牛乳に卵にコショウとパン粉

いわずもがな、ハンバーグである

現在中学一年の俺と小六の遊菜が腕捲りをしながらメラメラと闘志を燃やしていた

「よし！ 俺は玉ねぎを切るから遊菜はフライパンに油をひいて暖めといてくれ！」

「了解！」

ビシッと額に手を当てて敬礼のポーズの遊菜

そっぴや敬礼の角度で自衛隊と海上自衛隊の見分けがつくって知ってる？

そんな豆知識を披露している間に遊菜はフライパンの用意を終了。
俺は玉ねぎの皮を向いて半分に分けたところ。遅すぎたる俺

「次は何？」

「ん〜……じゃあ半分の玉ねぎ切ってくれ。みじん切りってわかるよな？」

「だいじょ〜ブイ！」

元気だなあこいつ。Vサインを出しながら手をつきだしての了承
玉ねぎを渡して俺より小さな包丁を渡す

「……………」

「……………」

トントントントントントントントント

包丁の切る乾いた音が台所に響く

しかしこの音は俺の包丁の音で遊菜の包丁の音ではない

トン……トントン……トント……トン

これが遊菜の包丁の音、途切れ途切れな音だが確実に玉ねぎを切っている

トントントント――

「痛……っ！」

「だ、大丈夫か？」

しかしその音は途切れ、代わりに遊菜の軽い悲痛の声を上げた

やっぱりまだ早かったかな？ いや小六なら調理実習ぐらいするだろうし……もしかして俺のせいかな？ 自分よりその物事をよくこなす人が隣で作業をしていたらいやでもいそいじまうのは当然だよな

「ちよつと見せてみる、綺麗に切れちまつてるなこりゃあ」

「大丈夫だよこのぐら――」

「んっ」

「――つて戒兄！？」

「ん？ んんんん？」

「ん」しか言っていないが「どおした？」と言っている

んゝ、玉ねぎの苦味と鉄の味がする。鉄なんて食ったこと無いんだけどなんで鉄だなんてわかるかという和多分血の中にある鉄分なんだと思う

「ぷはあ、大分血は止まったな。手を洗って残りの血出しとけ、絆創膏取ってくるから」

「あつ……………戒兄」

絆創膏を取りに今に行く

ばあちゃんに心配されたが大丈夫と言って戻る

遊菜の人差し指に絆創膏を巻いて治療は終了

「ご、ごめん戒兄」

「気にすんな。頑張って作ろうとしているのは伝わったから。後は俺がやっておくよ」

「えっ、でも、私……………」

「指を怪我したのなら調理はできないだろ？　大丈夫、焼くときには手伝ってもらうつもりだから」

「えゝ、あゝ、うゝ、でも……………」

「遊菜。自分が出来ないことを無理にするのは逆に周りの迷惑になる。わかるな……………」

「う……………うん……………」

人って言うのは周りに後押しされてやってしまうものだ。その中でそれができるようになる人もいるけどごく稀だ

少し落ち込んだ遊菜は俯く

それに少し罪悪感がひしひしとを感じるが悪化されるよりましだ。でも心のモヤモヤは消えないから

「か、戒兄？」

「なんだか落ち込んでたから」

頭を撫でる

落ち込みは消えていき笑顔になった

遊菜にはお皿の用意だけしてもらって下ごしらえを俺単独でやる

焼きに移ったところで遊菜を呼び焼き始める

四苦八苦しながらハンバーグは完成

姉さん二人が丁度帰ってきたので夕飯をする

俺達四人とばあちゃんじいちゃんて食事

久しぶりに集まれて嬉しいのか遊菜ははしゃぎながらハンバーグを自慢

凜華姉さんと穂花姉さんは驚きながらも美味しく食べてくれた

こてっ

遊菜が俺の肩に倒れてきた。　どうやら眠ってしまったようだ。　あんなにはしゃいでいたのだから仕方ない

凜華姉さんは「ふふっ」と微笑をあげながらお茶を飲み、穂花姉さんは遊菜とは逆の肩に倒れてきてはしゃぐ。ていうか重い

「戒君？　いま失礼なこと考えてたでしょ？」

なぜわかるんだ穂花姉さん。やっぱテレパシー以下省略

この日から遊菜の好物はハンバーグになったのは少なからず俺のハンバーグも要因の中に含まれるのだろうな――

――.....

俺の大切な家族の三人、じいちゃんもばあちゃんも大切な家族だ。今どうしてるかな？　こんど会いに行こう、皆で

「.....いい家族ですね」

「.....もしかして口に出てました？」

目の前の女神様は穏やかな笑みを浮かべていた

口に出していたのなら大分恥ずかしいんだが？

「失礼と承知で貴方の頭の中を覗かせていただきました。貴方は本心から大切に思っているのがわかって安心しました」

「なぜその必要が？」

「貴方に渡した力ですが、魔力の変化はわかりましたか？」

魔力の量が増加したことかな？

「渡した力は全部で抜け四つ。一つは膨大な魔力。一つはそれを使うのに相応しい身体能力。一つは貴方が望む属性の全ての魔法。最後の力は……私、神の力、『創造』」

「創造………？」

「無から有を作り出す神の力。人が扱うには重すぎる力。貴方にはこの力を使う資格がある。しかし……貴方がこの力を受け入れるかは貴方次第です。受け入れるもよし、拒むのもよし、如何いたしますか………？」

多大な力は人を狂わせる。彼女はそれを多く見てきたからこそ、この問いを出したのだろう

俺が力に溺れないか心配なのだろう

周りに拒絶されて壊れてしまうのではないか心配なのだろう

「女神様、貴女は何故俺を選んだんですか？」

「それは……貴方が信頼に値する人物なのだと確信したからです」

「貴女は俺を望んでくれたんですね？」

「はい」

ならば拒絶する理由もないし、逆に願ったり叶ったりだ

「では慎んで受け入れます。俺はまだ無力ですが、神様に頼られるのならこのぐらいの対価安いものです」

「で、では――！」

「貴女の増えてしまった責務、俺が肩代わりしましょう。それで俺は何をすればいいんです？」

出来ることなら遠くに飛ばされるとかは勘弁していただきたい

なんせ家族があんなんだから………ねえ？

遊菜は料理ができるがそれ以外の家事はからっきしだし、姉二人は論外だし

「貴方には自分の目の届く範囲を守っていただきたいのです」

「目の届く範囲だけ？」

「はい、他の範囲にはそれぞれの代理人の方々に頼みますので別段遠くに行くことはありません」

安心した。心の底から安心した。姉さん達と離ればなれにはならなくてすむ。ってなんだこのシスコンはと言われそうだが言わせてもらおう、シスコンにならないほうがおかしいわ！

「あとこの創造の力は貴方の魔力を大量に消費します。あまり多用途しないことをオススメします」

すっ…………と手を横に向ける女神様、そこには真っ白な扉が現れて
何かが聞こえる

姉さん達の俺を呼ぶ声

「この扉を開ければ戻れます。帰ったあとに数日で貴方をアシスト
する人材を送りますのでわからないことがあったら聞いていただい
れば全てお答えします」

「わ、わかりました。ではまたお会いできるのを楽しみにさせてい
ただきますね」

「私も、お会いできるのを楽しみにさせていただきます」

手を小さく振りながら俺を見送る女神様

そうだ

「女神様」

「はい？」

ドアノブを握ったところで気づいたので振り向く

「貴女の御名前は？」

「アテナ、女神アテナです」

「では、アテナさんと呼ばせていただきますのでアテナさんも俺の

ことは好きにお呼びください」

「……………では、戒人さん。ごきげんよう」

ドアノブを開いてその場から出ていった――

――……………

「戒人!」「戒君!」「戒兄!」

「おはよう……………三人とも」

三人を見上げながら目を覚ます

凜華姉さんは真剣な顔、あんまりしかめっ面ばかりしてたらシワが深くなるよ?

穂花姉さんと遊菜は涙を滲ませていた。泣かないでくれよ二人とも、二人は笑顔の方が似合ってるよ?

「戒くう~~~~ん! 良かったよ~~~~」

「戒兄いいいいー! 心配させてえー!」

「あゝ、はいはい二人共。ここ病院だろ? あんまり騒いじゃ駄目だぞ?」

「誰のせいだ誰の」

「凜華姉さんすいません、俺のせいです」

横から鋭いツッコミ、俺はそれを見事にクリーンヒット

穂花姉さんと遊菜は俺に抱きついてきてわんわん泣き叫んでいる

あゝあゝだらしく鼻水垂らしちゃってまあ

「ほら二人共だらしないぞ？ はいチーン」

「「チーーン！」」

「盛大だな」

抱きついている二人は鼻水を拭くために離れる

「……………」

「うげえ」

二人が離れたのを気に凜華姉さんが抱きついてきた。地味に首にキマって痛い

「……………心配させて、このバカ」

「……………ごめんなさい」

うなじに感じる冷たい物

なんとなくわかるので言わないが俺の心は締め付けられる

俺も凜華姉さんを抱き締めてお互いを感じ合う

それに二人も加わってなんだか苦しいけど甘んじて受けよう

「……………ん？　凜華姉さんどうしたの？　その怪我」

凜華姉さんの腕に切り傷を見つける

三人は俺から離れて凜華姉さんの切り傷をみる

少し試そうかな、もらった力

「凜華姉さん、見せて」

「大丈夫だ戒人、このくらい——」

「癒せよう」

「……！！！！？」

指に少量の水が滴り、切り傷に落ちる

シューシューと音を立てながら傷口は塞がって、三人はそれを驚きながら見ている

「か、戒君？　いつの間に水魔法を……………？」

「ごめん穂花姉さん。少し疲れたからまた今度話すよ。とりあえず帰ろう？　大分気分も良いから大丈夫だよ」

「いいのか？」

「皆と離れるよりはいいと思うんだ。駄目かな？」

「そ、そうか。じゃあ担当医の方を呼んでくるから安静にしている。二人とも、傍にいてやれ」

「はい」「了解！」

相変わらずの柔らかい返事と敬礼

凜華姉さんが担当医の方を呼びに行っている間に現状を二人に聞く

俺は帰路で倒れていたのを通行人に助けられてここに運ばれたらしい

そっぴや遊菜の髪型が違うな、いつもはヘアバンドで前髪を分けているのに今はヘアバンド無しだ

きいたら急いできたからはずしらしい

ほどなくして担当医さんが登場。診察の結果一日安静にして変化が見られないのならばいつも通りの生活を続けていいらしい

その日は家に帰宅後またベッドで眠った

しかしいつも通りではなく四人一緒に

三人の言い分は「添い寝だ」「添い寝よ」「添い寝だよ」だった

三人共心配してくれてたのだろう、嬉しい限りだ

第一話 最愛の家族（後書き）

恋姫の小説投稿してから次回投稿します

第二話　ちよつと変わった日常（前書き）

結局、こっちのアイデアが浮かんだから恋姫無視して書いてしまった。ネタギレになるまで書くつもりです。毎回一万文字以上を目安に書いていこうと思います。

第二話　ちょっと変わった日常

チュンチュン……………チュン……………チュン

「ん……………は……………ふあああう…ふあ……………ひゅひゅひゅ」

朝、窓からの日差しと雀の鳴き声で目を覚ます。

今日は二年生になって最初の日——では無く、二日目である。

どうやら昨日は一日中病院で寝たきりだったようで、姉さん達も昨日は学校を休んで病院に泊まつたらしい。

って教師二人も一日同時に休むとか大丈夫なのか？

特に穂花姉さんは代えが効かないって言うのに……………。

遊菜だって高等部に入って初日に休むなんて第一印象が悪くなるぞ？　嬉しい限りだけど。

まあそんな三人ですが、今俺の隣で寝てます。

「どうやってこんなちっさいベッドに四人も……………無茶し過ぎだろこれ」

先ほどの発言だか語弊があつたな。

正確には凜華姉さんは俺の頭を抱くように左で寝ていて、穂花姉さんは逆の右に俺の腕を抱き締めながら寝ていて、遊菜は……………小さ

い時と同じ寝方、俺の胸に顔を埋めながら眠っている。

……暖かいな、これポカポカする。

いや暖かいなんてレベル飛び越えて暑いな、これ。

「五時か……用意しないと」

起き上が……

「……………」

「むにやむにや……………戒……………君……………」

「すう……………すう……………」

……………三人ともまだ寝てるから起きれない

参ったな、新聞取って、昨日の溜まった洗濯に、朝食作って、今日の用意しないといけないんだが……………そういや今日は新一年生の学校案内をしないといけないんだっけ？

しかしなんで二日目に案内しないといけないんだ？

昨日のうちに案内しとけばいいのに……………。

総合学園は新一年生に新二年生が学校案内をする決まりがある。

現校長が交流を目的に作った行事なんだがなぜか二日目にする。

初日には学校の授業の説明、終わり次第、魔法適性審査を受けて帰宅するのが一年生のスケジュール、何故わかるかと言えば俺も受けたからだ。当然だが。

適性審査の基準は三つ、魔力の量・使用可能な魔法・使用可能な魔法の活用。

魔力の量は簡単に『現在保有している魔力の量』。
使用可能な魔法は『属性の数と魔法の数』。

活用は『その魔法を機転を利かせて他の事に役立てる』だ。

因みに俺は学年四位。

魔力の量は六位、魔法の数は三位、活用は一位。

多分四位になれたのは活用のおかげだ。

面接官の人達に家でやっている事を話して実践。特にマッサージは好評だった。やはり世界中で一つしかない統合学園の教師役は肩が重くなるようで、それを労って最高のマッサージ、火で手の温度を上げ、雷で適度な痺れを加えたマッサージは教師間で有名になり、遂には校長先生にも気に入られ活用は一位。

しかし総合一位の人物が学校案内を請け負う筈なんだがなぜか俺が請け負うようになった。

なんでも一位の『アイツ』が俺を指名したらしい。うん、『四』って不吉な数字だよ、現に面倒事押し付けられたし。

あれ？　じゃあ何で不吉な数字No.1の十三位の人是不幸になつてないんだ？

ちよつと俺の不運を分けてやろう、誰だか知らないが。

疑問がある。一年生は総勢四百人、一クラス四十人なので十クラスある。

まで、それを全員俺が案内するのか？　いや、一時限一時間の統合学園だ、六時間授業の内に四百人案内するのは不可能ではない。大分しんどいが。

多分クラスを半分分けて案内するのだろう、三時間で二百人を案内したあと……あ、思い出した、一位の奴と一緒に案内するんだつたな。なら……『アイツ』がなんかしてきそうだけど多分大丈夫。

思い出したのは一位の特権、誰かを補佐に指名できるというもの。

「どうでもいいことは放つといて、この肉体拘束をどうやって解こうか」

頭でなんやかんや考えてても現状は変わらない。

力任せに解いたら起こしてしまつて可哀想だし、どうするか……。

「ん…………んあ…………」

「ふ…………ふあ…………ん…………」

「あ…………あうん…………」

「……………」

なあ、第三者が今の現状を見たらなんて思う？

俺なら静かにその場を去る。

断言しよう。いやらしい事した思い浮かばない。

何だかんだ言っても三人共魅力的な人物だ。

血の繋がりが無かったらあんなことやこんなことをしてしまっても仕方がないと断言できる。

恥ずかしくないのかな、この三人。

「ん……………なんかないかなあ、ちょっと試してみよう」

まずは穂花姉さんだ。

幸い右腕を絡められているがなんとか解けるはず。

「ん、ん……………」

「なん……………だと……………」

テレパシーでも——もういい加減飽きるわ。

動こうとした途端にさらにさらにギュツと腕を抱き締める穂花姉さん。それと同時に柔らかい二つの丘がムニユツと形を変形させるからたまったもんじゃない。

「仕方ない。凜華姉さ——」

「……………」

「なん……………だと……………?」

まさかの凜華姉さんにもテレパシーが伝わったらしい。

さつきより息苦しくなった。頭を抱き締めている腕をさらに強く締める。

この攻略を始めてはや三十分。まったく進歩もないどころか更に悪くなった。

ああ、静かに悟ったよ。次の行動も遮られるのだと。

「ふ……………ふわあ〜」

「なん……………だと……………?」

まさかのフラグが折れた。

俺の上で眠っていた遊菜が目を覚めたのだ。

少し赤みがかかった黒髪のショートカットの髪が日差しに照らされて神秘的な雰囲気醸し出しているがその本人の顔はシヨボシヨボしている。

体の重みの要因の一つが消えたおかげで大分楽になった。

「ああ……あ、戒兄、おはよう」

目をぐしぐしと擦りながら朝の挨拶。うん、挨拶は人間関係を良くする第一歩だ。これ今度のテストに出すから覚えておくように。なんのテストかって？ 知るかそんなもん。

「ああ、おはよう。さて遊菜、俺の上から降りてくれ」

「ん、わかった」

ノロノロとだが、俺の上に跨がるようにしていた遊菜が素直に降りる。

素直でよろしい。さて、起きにくい要因が一つ減ったがこの二人をどうするか。

遊菜の肩越しに見える時計は現在五時三十五分、最低でも後十分でこの二人をどかさないと間に合わない。

一家の兄兼弟兼家政夫は毎日朝が早いのだ、中二からずっとそれを守ってきたのだ、偉いだろう？ えっへん。

と、心の中に、両手を腰に当て胸を張り鼻を「ふふん」と鳴らしている俺がいる。俺こんなキャラだっけ？

「戒人は良い主夫になるな」

「いや、俺は主夫になる気は——って凜華姉さん？ いつの間に目を覚ましたんだ？」

俺から見て左から聞き覚えのある凜とした声。言うまでもなく凜華姉さん。

学校とは違い、束ねたウェーブのかかったクールブラックの肩より少し長く伸びた髪を肩から垂らしたその姿からは『冷徹な女王』とは想像がつかない。一瞬どこの老舗旅館の女将だと突っ込みたくなっただけだ。

「って凜華姉さん、なんで俺が考えたことがわかったんだ？」

「弟の考えている事などお見通しだ。長女をなめるなよ？」

わあ、流石長女。すごい、長女すごい。

とまあ、姉弟の知られざる秘密がわかったところで凜華姉さんも俺から離れて髪をときに行った。統合学園の教師の朝も早いのだ。

当然穂花姉さんも早い………筈なのだがまだ起きない。因みに現在五時四十分、よし、後五分だな。いけるいける。

「穂花姉さん？ 早く起きなきゃおしゃれ出来ないよ？」

「おしゃれなんていらない。見せる人がいないもん」

わあ、聞きました？ 今の言葉。嫁入り前の女性とは思えませんよね？

まあ、元が良いから構わないと思うが、折角の綺麗な黒髪がボサボサなのは勿体ないなあ———って起きてんじゃん！

「穂花姉さん、頼むから起きてくれ。朝の家事が出来ない」

家事が出来ないのは腕を掴まれているから。

「いやゝ、後五分」

「その後五分が俺にとってのタイムリミットなんだよ……………」

定番の後五分キター！ 言わせてもらうが後五分って言った奴は必ず遅刻するもんだ。友人に一人実例がいるから。

あーヤバイぞ。マジで時間がヤバイ。

……………使いたくはなかったんだがな、仕方ない、見せてやるよ！
お風呂で発動！——じゃなくて奥の手発動！

「……………髪といてあげるから起きてください」

「はいっ！！」

はやっ！？

穂花姉さんは頬を擦り付けていた俺の腕から飛び起き化粧台にいつものものではない早さで座る。

そしてウキウキと櫛を俺に向けてくる。

一つ感心したのは櫛の持ち手をこちらに向けていること。やっぱり教育は行き届いているな家の家族は。

因みに化粧台には凜華姉さんが先にいたんだがタイミング良くのいて穂花姉さんと交代した。遊菜はまた夢の世界に飛び込んでいった。もちろん布団の中で。

「はやくっはやくっ」

「はいはい。わかりましたよお姉様」

櫛を受け取り旋毛から毛先までとかしていく。

ディープブラックの髪は腰ぐらいまで伸びていてなかなかのものに仕上がっている。

穂花姉さんは髪をあまり切らない。確か前切ったのは…………俺が物心つく前らしい。

今のうちに紹介しておこうか。凜華姉さんの髪は若干ウェーブがあった肩以上の長さのクールブラック。

穂花姉さんの髪は腰ぐらいまで伸びているディープブラック。

遊菜の髪はショートカットの若干赤みがかかった黒髪、濃い茶髪かな？ 使える魔法は“土”と“風”一年で二つの属性を使えるのは珍しいけど両方ともまだまだ未熟だ。

俺の髪は若干青みがかかった黒髪で直毛なんだけどなんだか後ろ髪が風に吹かれたかのようににはねている。真っ直ぐに。

この変わった色は両親譲りのもので、母さんは濃い茶髪、父さんは青みがかかった黒髪だった。

凜華姉さんと穂花姉さんは両方の血がまんべんなく、遊菜は母さん、俺は父さんの血が多いのだと推測する。

奇しくも家族全員で八属性全てを使える。奇妙なものだ。

「はい終わり。さつさと着替えて準備しなよ」

「ありがとつ、戒君」

「……………頼むから学校でその呼び方止めてくれよ？ 皆から注目されて恥ずかしいから」

主に男がよく俺に嫉妬や羨望の眼差しという名の矢を飛ばしてくる。

「わかったつ、戒君」……………はあ」

ため息を一つ。

俺は部屋から出て一階に降りていく。

遊菜はまだ起きなくてもいい時間だから寝かしておくとして、準備準備。

洗面所に行き、二つある洗面器のうち一つを凜華姉さんが使っているからもう一つの洗面器を使って歯磨き手洗い顔洗いとしていく

新聞をポストから取りだし、住宅街に住んでいる、体操や花に水や

りをしているおじいさんとおばさんに挨拶を済ませる。

お次は洗濯

「やっぱり洗濯多いなあ……………」

黄昏ながらも洗濯機から昨日の夜から水抜きしておいた洗濯物を洗濯力ゴに入れて中庭に。

中庭っていつでもそう広くはなく、物干しが二つと少しの花壇があるだけの芝生の庭。

この家は姉さん二人の給料で借りているもので、実は統合学園の所有地にある。

統合学園の教師は統合学園の所有している建築物に住むか自分が探した家に住むかを決められる。

教師だからといって集中して住んでいるわけではなく所有地はバラバラだ。

「あら、おはよう戒人君。毎日早いわね」

「おはようございます。豊美さんも早いですね」

挨拶をしてきたのは右隣に住んでいる島田^{しまだ}豊美^{とよみ}さん。

同じく豊美さんも洗濯物を干しに出てきたのか俺んちより多くの植物を飼っている中庭に出てきた。

挨拶をされたら挨拶をする。当然。

挨拶は人間関係を以下省略。

豊美さんはまだ家事をこなせかった俺に指導をしてくれた第二の母みたいな人だ。

豊美さんは中学一年の双子の娘をもつ二児の母。

旦那さんはいつも出張であまり見ない。一度会ったことがあるけど優しい人だった。大分尻にしかれていただけ。

豊美さんも優しいおばさんで、見た目はふくよかとしか言えない。

毎日家計をやりくりしているのは足は大分遅いもといふとましい。自慢のママチャリで毎日駆け回っているだけはある。電動自転車なんて知ったことかと世間話で豪語していた。

「昨日は凜華ちゃん達が慌てていたけど何かあったの？」

「ああ、実は昨日、帰宅途中で倒れてしまったようで、昨日は一日中病院で――」

「なあってすってえっ!!!??」

「どわあっ!!!??」

何も隠すこともないと思い話す。と驚愕の声が住宅街に響き渡った。

俺もそれには驚いて後退りをしてしまう始末。

あゝあゝ、朝の運動をしていたじいちゃんが腰抜かしちゃってるよ。花に水をあげてたばあちゃんは入れ歯を飛ばして……………花に落下した。ばあちゃん、ちゃんとポリントしないとダメだよ。

「島田さん、どうかなさったの？ 大声だして」

「またセールの記事でも見つけたのかい？」

同じく朝の家事をしていた母親様方が集まってくる。

「違うわよ！ 戒人君がね、昨日入院してたんだって！！」

どよっ！ つていう効果音が聞こえたかと思うと庭を仕切っている柵を飛び越えて庭に入ってくる豊美さん——つてなんて運動神経してるんですか貴女は！？

「大丈夫なの！？ 調子は悪くないの！？ まだ若いんだから無茶しちゃだめよ！！？」

体のいたるところをガシガシと掴みながら心配してくれる。

庭前に集まった奥様方も心配そうな目で俺を見てくる。なかなか恥ずかしいんだが……………。

「だ、大丈夫ですよ！ 現にこうやって家事もしてます。それに、無茶なんてしてません。いつも通りですよ」

「本当に？ 本当に大丈夫？ 本当に無茶しないでよ？ 戒人君は

私の子供でもあるんだから」

「あ……………」

心が跳ね上がる。豊美さんの言葉が心に突き刺さり、感動が響く。

第二の母みたいな人だと思っていたのは俺の勝手な考えではなかった。

「あ、ありがとう……………ございます。嬉しいです。……………母さん」

『!?!?!?』

忘れていた。母さんを失ってから姉さん達が母親代わりだったけど、本当の母親の暖かさを、俺は忘れていた。

『喜怒哀楽』で今の俺の心を表すのなら、間違いなく『喜』で満たされているだろう。

人との繋がりが、ここまで心を『喜』に染めてくれるのが嬉しくて仕方がない。

今の俺の顔は、作り笑いなんかじゃない、本当の笑顔だろう。

もしかしたら涙が溢れてるかもしれない。でも恥じることもないだろう。これは俺の本当の心が出したものなのだから。

だからこそ、真っ直ぐにお礼を述べることができる。親しみを込めすぎて、豊美さんのことを母さんとまで呼んでしまった。気を悪くはしていないよな？

「…………あれ？ あ……………豊美…………さん…………？」

豊美さんは何故か静かに佇むだけ。

奥様方は俯いてる人もいれば、後ろを向いて目を擦っている人やこちらを見ながら口を押さえながら涙目の人もいる。

ハッ！？ まさか「あんなんかに母親呼びわりされたかないわよ！！」的なことを思っているのか！！？

俯いているのは小さく悪口を言っていて、目を擦っているのは怒りのあまり目から出た涙を拭いていて、口を押さえながら涙目の人は笑いを堪えているからなのか！？

そして豊美さんはそれを真っ直ぐに受けたために俺の顔なんて見たくないな感じに！？ なんてことだ！ やっぱ俺の勝手な想像だったというのか！！？ ハッ！？ これが世に聞く『孔明の畏』！！？（たぶん違います）

「……………戒人君」

「は、はいっ！！」

あまりの衝撃で心の中の俺という俺を総動員した会議を開こうとした直前に豊美さんの声が耳に入る。

いきなりだったので声が裏返ってしまったじゃないか！ ビビッてんの丸わかりじゃないか！ どうせさつき見えない孔明さんが「今です！」って豊美さんに告げただろ！ 孔明さんはホントに頭の

良いお方!!

《ギョッ》

「え……………？ あ…………… 豊美……………さん……………？」

「……………さつき『母さん』って呼んだんだから、そのまま『母さん』って呼んで？」

「か……………母……………さん」

豊美さんが俺の頭に手をかけて引き寄せた

あまりに予想 G U Y だったから戸惑いを含んだ言葉が口から出た

『母さんって呼んで』

その台詞が頭から離れない。戸惑いながらも豊…………… 母さんをお願いを実行したら首にかかった腕はさらにさらにと力が入り、頭にかけている手は優しくなでなでと頭を撫でてくる

ああ……………、と心の中で安堵の息を漏らす俺がいることに少しばかり恥ずかしさがある

でもホントによかった。このまま毎朝ギクシャクしながら生きなきゃいけないと思うと、冗談ではない寒気がした

「戒人君。今夜うちに来なさい？ 貴方が倒れたのは疲れてたから

よ。私とその疲れを忘れさせてあげる」

あれ？　なんだこれ。なにやら豊美さんが慈しみに溢れた母の様な雰囲気と獲物を仕留めた雌豹の様な雰囲気半分ずつ持っているみたいだ。

随分艶やかな表情をしているし……………。

「島田さん！　駄目よ出張で旦那さんがいないからって！　気持ちにはわからないでもないけど旦那さんを裏切っちゃ駄目！」

旦那さんを裏切る？　ちょっと待ってくれ。豊美さんは一体何をする気なんだ？　ただ単にうちでゆっくり過ごせって意味じゃないのか？

ちょっと頭の中で考えよう。夫婦が裏切り行為と考えるナンバーワンってなんだ？　一番目に思い付いたのは不倫。一度母さんが父さんのケータイに女の人からのメールを見つけてしまったのが原因で離婚話になったことがあったので、夫婦間を壊す一番の原因は不倫だと脳髓に刻み込まれている

結局、職場の友人の女性からのメールだったんだがな、他の人にも思わせ振りのメールを送っていたらしい、小悪魔だな

ん？　じゃあ旦那さんを裏切る行為は不倫なんだよな？　じゃあ豊美さんは俺と……………な、なんだってー！？

「ちよつ！　豊美さん！　それは流石に駄目だよ！？　その……………俺だって嬉しいけどそんな！」

俺だって健全な男子高校生だ。女性に興味が無いわけがなく、その、あの、ゴニョゴニョ

あ、だからといって姉さん達はその対象には入らないからな？

「母さんって呼んでって言ったでしょっ？」

「そんなかわいく言っても駄目なものは駄目！俺への労いの為に人生棒に振っちゃ駄目だ！もっと家庭を大切に——うひゃわあ！？」

奥様方が心配そうな目で見守るなか、俺の裏返った声が出る

な、なんだこの寒気は！？特に背後からの寒気が尋常じゃない！

いきなりの奇声で母さんも腕に入っていた力を緩めた。それを好機と判断し、母さんから離れる。背後からの寒気を確かめるために振り向く

そこには……

「（早　ク　朝　食　作　レ）」

口パクでそう告げる、腕を組み、いつもの出勤の髪型に整え、黒スーツ姿の凛華姉さんが窓に立っていた

『冷徹な女王』

その姿はまさにそれだった。この寒気は姉さんの氷属性の副産物。感情が昂ると属性特有の感覚が溢れ出す。

火なら熱気が、水なら湿気が、風なら突風が、雷なら静電気が、土なら匂いが、氷なら寒波が、光なら閃光が、闇なら静寂が、それぞれ使用者が溢れ出させる、感情の形

まだ氷だけ。つまり本気では怒っていないと言うこと。本気で怒ったときの姉さんを思い出してしまった。あの……寒くて真っ暗な闇を。

「……………」

「？ 戒人君、大丈夫？ なんだか体が震えているけど……………」

ガクガクブルブルガクガクブルブルガクガクブルブルガクガクブルブル

「母さん。お誘いは本当に有り難いのですが、まだ朝の用意が済んでいないのでそろそろ離してください」

「……………ハッ！？ ご、ごめんなさいっ、私ったら何を……………」

今気付いたかのような反応をした豊美さんはバツッと俺から遠ざかる。

感じていた体温が無くなってちょっと物悲しさがあるけど、それを無視して予め下準備をしておいた洗濯物をさっさと物干しに掛けてかごを抱えて縁側の窓へ——乗る前に後ろを振り向く。

そこには奥様方に囲まれている豊美さんがいて、俺の視線に気付いたのか此方を向く。

何かを言いたそうにしているがなかなか言い出せないのか口を開いては閉じを繰り返している。

時間が無いから俺の用を優先する。

「ありがとうございます。少し違っけど、母親を思い出させてくれて」

「え……？ えっと……あの………」

何を狼狽えているのかわからないが、俺は変わらず続ける。

「また、『母さん』って呼ばれてもらって良いですか？」

「……………も、もちろん」

「ありがとう。またね、『母さん』」

改めて言っただけで恥ずかしさが勝ってしまった。即座に窓を開けて居間に入った。

「戒人」

「はいっ」

ビクッ！

背筋がピンッと伸びた。

「いつもすまないな」

「……………え？」

「いや、お前が倒れたのは家事を無理にさせてしまったからではないか、と昨日思ったからだ。倒れた原因の一つには家事が関係していると……………」

聞いて呆れた。あんな恐怖を思い出したのにトラウマ掘り起こしただけだったのか。

「大丈夫。この通りピンピンしてるよ」

力こぶを見せて自慢気に言う。うん、なかなか遅しく育ってるじゃあないか。そういや知ってる？ 家事って日常で使う筋肉を重点的に鍛えられるから筋トレやダイエットには最適なんだぞ？

おかげで俺の身長は178センチ、高二にしてはでかくね？ 普通？ どっちでも良いや。体重は約80キロ。体重って身長を100引いたのが丁度良いらしい。うん、上々。

「それに今までそうしてきたんだ。やるなって言われてもやるぞ？」

「……………そうか。じゃあ朝食、早めに頼むぞ？」

「了解」

後ろから奥様方の賑やかな喧騒を聞きながら朝食を作り出した。

「「ご馳走様」」

「はい、お粗末様でした」

パチンと手をあわせてきれいな音をだして食事を終えた凜華姉さんとさつきいつもの服、凜華姉さんとは違い白いシャツに黒いセーターに白いスーツに着替え終わった穂花姉さん。

二人と俺と一緒に食べたのはモーニングセット。フレンチトーストにサラダ、コーヒーと朝は軽いものを主に作っている。まあ時々ものすごく腹が減っているときは朝っぱらから肉なんかも食べるが今日はノーマルメニュー。ちなみにコーヒーは凜華姉さんが角砂糖一つの少し苦いもの、穂花姉さんは苦いのが苦手だからミルク＋シロップのコーヒー牛乳的なもの、俺はブラックコーヒーを飲んだ。

ブラックコーヒーを飲む理由は父さんを真似して飲んだら良かったから毎日ブラックを飲んでいる。

「戒君ってすごいよね。ブラックコーヒーを平然と飲んでるんだもん。お姉ちゃんは無理だなあ」

「そうか？ ブラックコーヒーは珈琲の素の味が味わえるから美味しいのに。穂花姉さんも飲んでみたら？ はい」

「ホント……？　じゃあ、一口だけ」

マグカップの取っ手を穂花姉さんに向ける。

穂花姉さんはそれをおそろおそろと両手で受け取って……

「んく………苦い」

まあ、当然だった。

舌をべえつと出しながら涙目で俺にマグカップを返してくる。

そのべえつと出している舌に小さな角砂糖を乗せて中和をはかる。

「んむ。　ありがとう戒君」

「どういたしまして」

ニツコリと微笑みながら礼を言う穂花姉さん。

弟じゃなかったら赤面ものだな。この微笑みは。

「戒人。私も一口良いか？」

「ん。　どうぞ」

穂花姉さんと同じく凜華姉さんにも取っ手に向ける。

凜華姉さんは取っ手に指を通して受け取り、一口。

「うん……！　やはり苦いな……」

まあ当然の反応。

凜華姉さんには角砂糖ではなく穂花姉さん用に出したミルクを空になった凜華姉さんのマグカップに四分の一ほど注いで目の前にコト、と置く。

「ありがとう、戒人」

「どういたしまして」

穂花姉さんと変わらぬ対応をして、ブラックコーヒーの回し飲みは終了。姉さん達の望むことは大体わかる。伊達に一家の家事を全て担ってるわけではない。

と心の中で以下省略。

「そろそろ姉さん達行かなきゃ危くない？」

壁にかけている時計の現在時刻は六時四十分。

「そうだな。穂花、行くぞ」

「はい。リーちゃん」

「いつてらっしゃい。二人とも」

「ああ、また学校でな」

「今日も保健室に顔だしてね？」

「時間があればね」

「えー！！？　じゃあ私から戒君に――みゃ！？　り、りーちゃん！？　耳！　耳痛いやめてえー！」

「さっさと行くぞバカ妹」

「戒くーーん！　助けてーー！」

「いつてらっしやゝい」

「戒君の人でなしーー！………！！」

耳を引っ張られながら引きずられ、姉さん達は出勤した。

一緒に出ていった理由は簡単。凜華姉さんは車で出勤だから穂花姉さんも送ってもらったんだ。

「さて、後は遊菜だけだな」

二階に上がって俺の部屋に向かう。

ドアノブに手をかける………が、隣を見る。

そこには廊下があり、先には姉さん達の部屋がある。いくつか空き部屋があるこの家。なぜこんなに部屋があるかはわからないが多いに越したことはないな。

「遊菜、そろそろ起きろ、朝食はもう出来てるぞ」

「起きてるよ戒兄。後はご飯だけだから安心して」

「そうか。じゃあ食ったら先に行け。俺は残った用事を済ませてから行くから」

「はい」

穂花姉さんと遊菜つて雰囲気似てるよな。まあ遊菜は穂花姉さんほど甘えん坊じゃないだけましか。

遊菜は扉のそばにいる俺をスルツと密着すれすれで通り抜けて下に降りていった。

俺は部屋に入って布団を干すために窓を開けてかける。

窓を開けっ放しで出ていくのは無用心と思うかも知れないがご安心を！ セキュリティは万全！ 不法侵入者を発見次第闇沼へとご招待！ まあ嘘だが。警察に通報するだけだ。

「俺も着替えないとな」

着ていた黒いシャツとジャージを脱いで制服に着替える。

統合学園の制服は男子が学ランティスト、女子はブレザーティスト。

男子は黒いズボンに黒いカッターシャツで、そのカッターシャツは縁が赤く染められている。学ランは白と黒を基準に使っていて、襟とかが黒く着色してある。

女子も色合いは同じだ。

「…………俺も二年生か」

襟に着けたバッジを見て感慨深く思う。

統合学園は中等部、高等部、大学部にに分けられていて、中等部はブロンズバッジ、高等部はシルバーバッジ、大学部はゴールドバッジで、それぞれ“？、？、？”の数字が彫られていて、大学部は“？”まである。

教師もバッチを着けていて、プラチナバッジ。数字は彫られていないが“ティーチャー”のＴが彫られている。

「行ってきまーす！」

「おう！　またな！」

遊菜が玄関を開けて登校。

「そろそろ行くか」

遊菜が出ていって少ししてから玄関へ。

靴を履く。この靴は高等部入学祝いに凛華姉さんと穂花姉さんが買ってきてくれたもので、メンズウォーキングシューズだ。

何でも魔力が込められているらしい。

「行つてきます」

誰もいない家に俺の声が虚しく響き、警察を開けて駅に向かった。

そしてこの日から、俺の日常に変化が起こり始める。

幸か不幸か、この先の未来は誰も知りえない……。

まあ、どちらだろうと、今まで通りの『俺』を貫くだけだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748q/>

無秩序な世界の一人の代理人

2011年11月15日00時33分発行